

信州読書会 ツイキャス読書会

課題図書 村上春樹『国境の南 太陽の西』

信州読書会では、毎週、ツイキャスをつかった視聴者参加型の読書会を開催しています。

信州読書会のメルマガ登録者は、課題図書の読書感想文を 800 字で書いていただければ、放送中に紹介します。

(募集要項はメルマガでお伝えします)

また作品に関する質問・感想などは、どなた様も、放送中ツイートいただければ、とりあげます

信州読書会 ツイキャス <http://twitcasting.tv/skypebookclub>

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714

今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343

『ツイキャス読書会』音声のバックナンバーです。

<https://www.youtube.com/playlist?list=PLVj9jYKvinCsgP7jtFgzqxea6cgqd7mrf>

(各回の感想文は動画の下の説明欄に PDF へのリンクを張っております。)



第 89 回のツイキャス読書会の課題図書は、村上春樹さんの『国境の南 太陽の西』です。

読書感想文を提出して下さった皆さんありがとうございます。

村上春樹さん 2018.8.5 にラジオに出演するそうです。

[村上春樹の初ラジオ番組が 8 月放送 「走ること」「音楽」「文学」を語る](#)

『太陽の西とは何だろう？』

私は読み終わった後、頭の中でハテナマーク(?)がいくつも浮かびました。

始(はじめ)は、有紀子と結婚して二人の娘もいて幸せなのに、中学生の頃に仲良くしていた島本さんをずっと思っていて、ある日街で見かけて後を付けたりと何を考えてるのかなと思いました。

中途半端に浮気をしたりはするけど、心中をすとかそこまで行かなくても、駆け落ちするでもなく、どうしたいのかが分からないなと思いました。

一人っ子のせいにして我儘でひ弱で甘やかされているからを言い訳にせずと過ごしているようにも思えました。

あと、『太陽の西』という言葉もすごく気になりましたし、西は太陽が沈む所で人生が終わる事を意味してるのかな？ と思いましたが、でもそうなるとはじめの人生はなん何だろう？ と思いました。

最後に肩をたたかれていた所はホラーみたいでゾワッとしました。

(おわり)

「国境の南、太陽の西」感想

この物語は、主人公のハジメ君が島本さんと出会った小学五年生の終わり頃の回想から始まります。二人は家が近いということで、ハジメ君は、転校してきた島本さんの学校生活のサポート役になります。最初のうちは、異性という事もありどう接して良いか掴めていませんでしたが、お互いが一人っ子であるということをきっかけに仲が深まっていきます。二人ともこれまで一人っ子であることで嫌な思いをしてきたので、一人っ子特有の悩みを持つものとしての共感が生まれたのです。そこから接していくうちに他にもいろいろな共通点があることに気づき、お互いに一緒にいて落ち着けるほどに親密になります。

私はこの出会った時期の二人のやり取りが、とても小学生とは思えないくらい大人びていて少しおどろきました。私自身、ライトクラシックというものがあるということをこの本で初めて知りましたが、部屋で落ち着いてライトクラシックを聴いて楽しむなんてことができるのは、多分同級生にもいないと思います。島本さんは「ある時間が経ってしまうと、いろんなものがもうかちかちに固まってしまうのよ。セメントがバケツの中で固まるみたいに。そしてそうになると、私たちはもうあと戻りできなくなっちゃうの」という言葉をいいましたが、まだ干支も一周するかしないかの子が実感するにはかなり早熟な子だと思いました。

中学にあがり、学校も家も別々になると特別大きな問題があるわけでもないのに、自然と会わなくなっていました。二人はこれ以上ないほど相性が良かったので、他の人ではその存在を埋める事ができずに、また出会うまでそれからその虚しさを感じながら生きていきます。別れの理由に特別問題がなかっただけに未練が残るのではないかと思いました。

(おわり)

そしてある日、 あなたの中で何かが死んでしまうの

その病は、ヒステリア・シベリアナという。シベリアに住む農夫がかかり、ある日ぷつんと何かが切れてそのまま「太陽の西」へ向けて歩き通し、いずれ地面に倒れて死んでしまうそうだ。

バーに現れた島本さんが、本当に現在の島本さんなのかどうかははっきりしない。どこか夢の中の住人のような、現れては消える幻のような存在。

彼女が住んでいる場所が「太陽の西」だとしたら、ハジメくんは西へ西へいざなわれ、いずれ死に至ってしまうのかもしれない。もしかしたらもう死んでしまっているのかもしれないな、と思わせるラストだった。

ハジメくんは 1951 年生まれ。60 年代後半から 70 年代前半にかけての熾烈な学園闘争の時代に巻き込まれた世代。あえて自分で選んだわけではないが、社会の転換期における激しい発熱のように、学生はより高度な資本主義の論理に抵抗していた世代。

小説の中盤からの 90 年前後の東京の風景はとてもリアルだ。当時の青山通りの信号待ちで BMW に乗っているのは、きっと「ブルータス」に載っちゃうようなおしゃれなバーを経営している「僕」だろうから。

「他の人々が当然のこととして持っているものを、僕は持っていないのだ。自分には何かが欠けているのだ」ずっと何かが欠けたままで大人になってしまった人間が、いつまでも自分を誤魔化してしまうと「これはなんだか自分の人生じゃないみたいだな」と感じる。

この小説が発表された 1992 年は、バブルという祭りのような高揚感はすっかり冷め、行き場のない喪失感やどうしようもない虚無感が漂っていた頃。人生における理想の相手を渴望するハジメくんの惑いは、その浮かれていた気分への批判とも、失った精神への懺悔とも見える。そして村上春樹の静かな挑戦状のような気配を感じた。

時代の空気、政治経済や人々の欲望の波に飲み込まれないようにただ淡々と毎日書く。社会の発熱に侵されないよう、書くことと走ることを日課とする作家の覚悟。

明日から新しい 1 日をハジメたいと願う主人公の言葉を借りて、「僕らもやり直せるかな。明日からは冷静に」という作家の声が聴こえてくるようだった。

(おわり)

国境の南、太陽の西 感想文

国境の南、太陽の西を久し振りに読みましたが、イズミという彼女がいるにも関わらず、従姉のいる京都まで一人行くハジメ君の性欲の強さに驚きました。

イズミの従姉は、もっと近所に住んでるイメージがあったので、衝撃でした。

この小説の好きなところは、島本さん似を追いかけて、いかつい中年から封筒に入った10万円をもらうところと、義父に幽霊会社を作るから名前を貸せと言われ訳を聞くところ。

他には、義父に株を買えと言われ命令通りに800万円分しか買えなかったと言った有紀子にハジメ君が説教するところ。

やはり、印象に残る場面としては、島本さんとの箱根行きへの死のドライブでしょうか。

最後、ハジメ君が体が動けなくなってしまったラストに肩を叩いたのは誰なのでしょう？

読書会で盛り上がりそうですね。

僕は初読では、イズミかと思いましたが、今回は島本さんが迎えに来たんだ！ と思いました。

みなさんの意見が楽しみです。

うんちくとしては、村上春樹全小説の『国境の南、太陽の西』の解題で村上さんが、国境の南のハジメ君とねじまき鳥の岡田亨はもともと同一人物で、話が膨らみすぎた故に、奥さんからのアドバイスで外科手術的に、ねじまき鳥から切り取られた作品が国境の南なんだそうです。

国境の南を書いている途中、頭にあったのは雨月物語だそうです。

あと、ねじまき鳥の冒頭にかかってくる電話は本当はイズミからだったみたいです。

や～、久々に読んだら、タクシーの後部座席から表情の無いイズミがこちらを見ている場面で鳥肌が立ってしまいました。

(おわり)

『 遠い星と砂漠 』

小学生の頃、夜空で輝く星の光にかなりのタイムラグがあると図鑑で知った。目の前の現象を理解するだけでいっばいっばいな年代に、「目の前に見えているものは、現実ではない」ということは理解しづらい。だが、この小説で、私は再び「遠い星」に出会った。そして、「遠い星」は夜空にあるのではなく、我々の日常に当たり前に存在していると既に大人になった私は、なぜだか知っていたような気がした。

始は、仕事や家庭に恵まれても、欠落感や喪失感と共に生きていた。現在の状況が幸せであればあるほど、欠落感が浮き彫りにされ、それを埋めようと必死になってしまう。逆に、不幸であれば、そんなもの目立たないのだ。その埋め合わせのために、過去の島本さんを必要としてしまう。あの光源氏も、傍から見てまばゆい人生を送っているというのに、唯一手に入らなかった藤壺の影を、藤壺の死後も追い求め、周囲も自らさえも傷つけてしまう。でも、影は影だ。一番の理解者で愛する人であった紫の上をこれ以上ないくらい傷つけてしまう。まるで、始が有紀子を裏切ったように。

人間は、「現実」を「見たいもの」に変換できる機能が備わっている。始はイズミの肉体を、自らが欲していた島本さんに変換してしまう。でも、その島本さんは始が見ている影なので、どんなに求めても実体はない。だから、大人になって出会った島本さんは足が悪くなかった。もちろん、白い封筒もナット・キング・コールのレコードも、始が「見たかった」影だ。唯一、島本さんの残り香があるとすれば、赤ん坊の骨を流したところだろう。始に無理をさせてまで流したかったのは、自らの骨であり、肉体のない島本さんからのメッセージだったかもしれない。

始の言うとおりの、島本さんは始にとっての「遠い星」だったのだろう。12歳の頃の光が、37歳の始に届いているだけなのだ。そして、「砂漠」は有紀子のことだろう。生きる「場所」としての……一見何もない砂漠だ。

始は、有紀子のいうとおりの「ろくでもない人間」なのだろう。イズミや有紀子を直接的に裏切り、連絡を取らなかったことで、間接的に島村さんも傷つけている。

人間は、自らが傷つけられたことは覚えているが、他人を傷つけたことは覚えていない。私自身も、かなり傷つけられながら生きてきたが、それと同じくらい他人を傷つけてきたと思う。私自身、誰かにとっての「ろくでもない人間」なのだ。と同時に、誰かにとっての「大切な人間」でもありたい。贅沢かもしれないけど。

(おわり)

岡山読書会のブログです。過去のコラムなども掲載されています。ぜひご覧ください。<http://ameblo.jp/kaoru8913/>

スカイプで個別読書を主催されています。ご興味ある方はブログからお問い合わせください。

ツイキャスのチャンネルはこちら <https://twitcasting.tv/yuuki27144>

『ふるえながらのぼっていく』

今年の夏も、鮎が故郷の川を遡っている。岐阜県のある川では、水不足で遡上する鮎が溢れかえっているというニュースをネットで見た。中島みゆきの『ファイト』の歌詞ではないが、魚たちは生まれた川を遡る。子孫を残すための本能なのだろう。フロイトは『快感原則の彼岸』という論文で、その本能は、エロス(性本能)とタナトス(死の欲動)であると論じている。産卵と射精の中で、遡った魚たちは役目を終えて、川底に沈んでいく。写真家アラーキーは、被写体からエロトス【エロスとタナトスをあわせた造語】を浮かび上がらせるのを表現のテーマにしているようだ。

島本さんと始が石川県のある川を訪れる。その源流のような川で、島本さんは散骨する。彼女の亡くなった子供の骨だ。この話は、川に遡るのを忘れてしまった始に、イズミと島本さんが交互に現れて、一緒に川を遡るのを促すのがテーマのように思えた。

一人っ子で、およそ協調性のない主人公である。学生時代を政治の季節の中で過ごし、就職して、都会生活の中で埋もれていたのだが、妻、有紀子との出会いを機に、義父から出資してもらいジャスパーの経営者として成功する。

時代背景と言えば、学生運動が終わり、ニクソンが訪中して、冷戦構造が自由主義陣営の勝利に傾く流れが、劇的に加速した時代だ。始が37歳になった1988年には、日本は、バブル真っ只中である。マルクスの『賃労働と資本』ではないが資本の価値の自己増殖によって、始も豊かさを享受する。一方、親が熱心な共産黨員だったイズミは、そのこととはたぶん関係ないが、始と従姉妹の関係で傷つき、精神を病んで、不遇の人生を送っている。

イズミが始の何に傷ついたのかと言えば、始の中にある無自覚な悪に傷ついたのだと思う。これが一体何なのか？この後に書かれた『ねじまき鳥クロニクル』では、その悪が、ノモンハン事件にまで遡る歴史的な由来をもって究明されている。

歴史を遡ることも、エロスとタナトスの本能かもしれない。何かのきっかけで、存在困難をおぼえれば、私たちは私たちの由来に立ち返るのかもしれない。

(おわり)

『信州読書会』メルマガ登録はこちらから http://bookclub.tokyo/?page_id=714
今後のツイキャス読書会の予定です。 http://bookclub.tokyo/?page_id=2343